

多治見で「注文に時間がかかるカフェ」

発話の勇氣、接客に挑戦

吃音に悩む若者、スタッフに

カフェは発起人の奥村安莉沙さん(32)＝東京都＝が動。奥村さん自身も吃音の



吃音当事者が接客に挑戦した「注文に時間がかかるカフェ」＝多治見市旭ヶ丘、多治見美濃焼卸センター

ためにカフェで働く夢を諦めた過去があり、接客業に挑戦したい若者を応援する目的がある。これまで全国31カ所で開催、活動は書籍化もされた。

カフェは固定の店舗を持たず、開催地ごとに交流サイト(SNS)でスタッフを募りながら実施している。今回は接客業を盛り上げたいパローホルディングス(HD)の協力で事前の広報を行い、同センターに出店した。

スタッフの1人は県出身の大学1年生高橋陽菜さん(19)＝三重県津市＝。小学校低学年の頃から滑らかに話し出すことができず、同級生に話し方をまねされることが特に苦痛だった。

「言葉を発する前に『あ、どもり(吃音になり)そつだな』とわかる。意見を言ったり、話しかけたりする

こと自体を避けるようになっていた」と話した。以前から知っていたカフェが地元で開催されると知り、思い切って手を挙げた。

高橋さんらは事前に予約をした約50人の客を出迎えた。客と目線を合わせ、ときどき言葉に詰まりながらも笑顔で歓談。「吃音がある人が話すのに時間がかかっている。どうする？」などクイズを出題したり、好きなスイーツの話題で盛り上がった。会話は柔らかな雰囲気にも包まれた。

客の年齢や家族構成はさまざまで、発話障害のある人やそうでない人もいた。初めて参加したパート従業員の女性(多治見市)は「吃音の人は100人に1人と聞いてとても身近に感じた。ぜひ理解が広まってほしい」と期待を寄せた。

正午ごろから半日に及んだ接客を終え、高橋さんは「真摯に話を聞いてくれるお客さんばかりでうれしかった。吃音があってもなくても、関係なく接客ができるような世の中になってほしい」と話し、額の汗をぬぐった。